

観光客の回遊性を促進する要素に関する分析 歴史的町並み・佐原における回遊性向上に関する研究 その1

回遊性 歩行者追跡調査 歴史的町並み
観光客 佐原

正会員 ○パンノイ・ナッタポン*

同 窪田亜矢** 同 鈴木亮平***
同 櫻庭敬子*** 同 大熊瑞樹***

1. 背景と目的

近年多くの観光客が訪れる香取市佐原では、観光客の存在が地域のまちづくりを促進させるだけでなく、最近では観光客による地域の商業活性化や空き家再生を図ろうとする動きが見られる。この背景において、本研究は適切な「空間整備」および「情報提供」により、観光客の回遊性を向上させることで、地域の資源の再発見や住民のまちづくりへの意識を促すとともに、商業活性化や空き家再生等の地域ストックの活用を促すことを目指している(図1)。本研究は佐原重要伝統的建造物群保存地区(以下、佐原重伝建地区)および周辺地域における観光客の回遊性の向上のための実態調査、社会実験、およびまちづくり提案を行った。本稿は、観光客の回遊行動の実態および回遊性を促進する要素を明らかにすることを目的としている。

2. 調査概要

2.1 調査方法

本調査は朴ら(2006)⁽¹⁾が考案した「歩行者追跡調査」を調査方法としている。「歩行者追跡調査」とは、実際の街を歩いている人の経路をリアルタイムで追ひ、施設の入りを1サンプルの追跡開始と追跡終了としている。本稿では、佐原重伝建地区に訪れた観光客をターゲットに調査を行い、繰り返しサンプルを採取し、観光客の「歩行ルート」、「出入りする施設」および「行動の特徴」を記録した。

2.2 調査日程とサンプル数

調査は2009年6月13-14日、11月16日、12月25日に、合計3回行われ、175サンプルが採取された。

2.3 調査結果の表現方法

表現方法はサンプルの色を薄くし、すべてのサンプルを同じ地図に重ねて表示する⁽²⁾。サンプルを重ねる度に色合いが濃くなり、より濃く表現される歩行ルートや施設は比較的観光客によく使われていることを示している。

3. 調査結果(図2を参照に)

3.1 観光客の回遊範囲

佐原重伝建地区に訪れる観光客の回遊行動は、北は佐原駅、東は八坂神社、南は市立佐原小学校、西は佐原公園までの範囲で観察された。回遊行動が観察される街路は、回遊行動の特徴により「JR佐原駅から重伝建地区に向かう街路」と「忠敬橋を中心に東西南北に広がった香取街道と小野川沿いの街路」に大きく分けることができる。

3.2 観光客の回遊行動の特徴

佐原駅-重伝建地区間でよく観察されるのは、「JR佐原駅と佐原重伝建地区間の移動行動」であるのに対し、重伝建地区と周辺では観光客の「歴史的建造物や観光施設をめぐる歩く行動」が主に観察されている。この特徴を表した

調査結果として、佐原駅-重伝建地区間では観光客が回遊行動の出発点と終着点としている施設の数が重伝建地区とその周辺に比べて少なく、長い距離を空けて点にしていることが明らかになった。これは重伝建地区と周辺に比べて、佐原駅-重伝建地区間での観光客の歩く距離は長く、あまり施設に立ち寄らないことを示している。また重伝建地区での観光客の回遊行動は忠敬橋周辺に集中しており、観光客がエリアの東西南北の端の目的地に行くと、また忠敬橋に引き返し、忠敬橋を拠点に次の目的地に向かう傾向がある。

さらに、多くの観光客は町歩きの際、町歩きマップを見ながら町歩きをしている。また、回遊範囲の中には観光客がよく止まって、歩く方向や目的地を確かめる場所があり、その場所周辺には目印となるような施設が存在している。また目印となる施設の周辺では観光客が回遊行動をやめ、忠敬橋に引き返す傾向が強い。

4. まとめと考察

4.1 回遊性とまちづくり

佐原では「商業活性化」と「低未利用物件の再生」が重要な課題である(図2)。観光客が集中する忠敬橋周辺では低未利用物件が再生され、商業活動に賑わいが見られることから、観光客はこれらの課題の緩和を促進する要素だと捉えられる。観光客が課題を緩和するようになるのには、佐原駅-重伝建地区間では「駅と重伝建地区間の移動」から「商店をめぐる歩く」回遊行動に転換し、商店が集積する路地に観光客の回遊行動を促す必要がある。重伝建地区と周辺では、重伝建地区内から魅力的な資源を持つ周辺へ観光客の回遊範囲を広げることで、観光客の滞在時間と消費額を拡大させ、低未利用物件の活用につなげることが求められる。また、回遊促進プロセスの通じて、住民のまちづくり意識を高めることもできる。

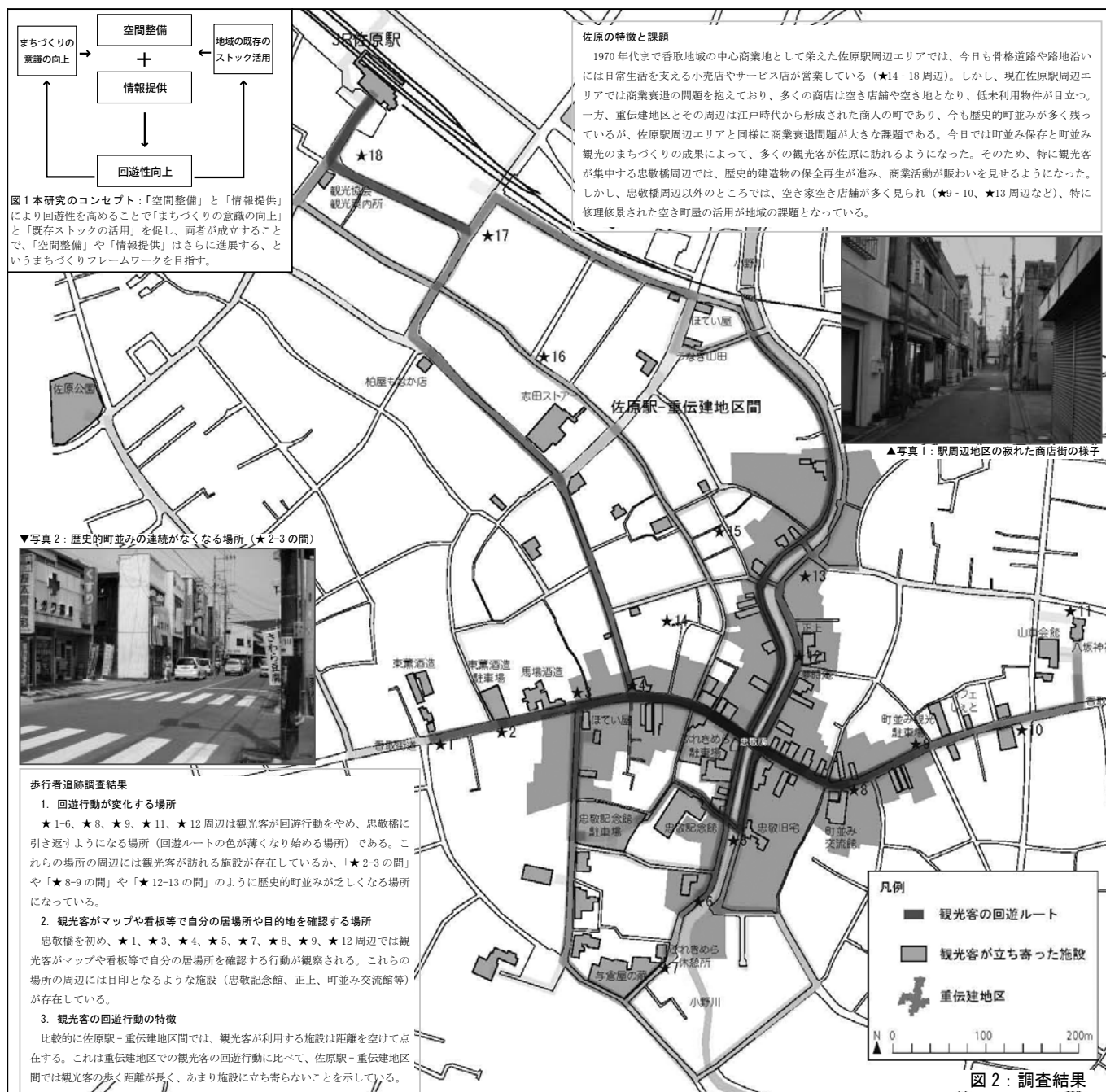
4.2 回遊性を促進する要素

(1) 明確な都市空間

「明確な都市空間」とは、歩行者が自分の位置や方向を明確に認識できる都市空間のことである。佐原重伝建地区では忠敬橋が地区の中心であることが明瞭であり、忠敬橋にいれば佐原重伝建地区の都市空間を認識しやすいため、忠敬橋は観光客の回遊行動の起点となっている。また伝建地区での観光客の回遊範囲の端には目印となるような施設があり、その周辺に観光客がよく地図を確認することから、観光客はこれらの施設を目印としていると思われる。

(2) 魅力的なスポット

観光客の回遊範囲の端には、「東薫酒造」、「正上」、「町並み交流館」、「忠敬旧宅」などの集客力を持つスポットが



存在している。これらのスポットの周辺を境に観光客の回遊行動が激減していることから分かるように、魅力的なスポットは観光客の回遊行動の目的となっており、観光客の回遊範囲を規定する要素になっている。

(3) 町並みの連続性

「歴史的町並み」は重伝建地区と周辺の都市構造を構成するもので、佐原の観光資源にもなっている。図2の★3や★13周辺では歴史的町並みが乏しくなっているため（写真2）、観光客はこの周辺で回遊行動をやめ、忠敬橋に引き返すと考えられる。重伝建地区の周辺に町並みが連続すれば、観光客の回遊範囲もさらに周辺エリアに拡大すると考えられる。

(4) 町歩きの情報提供ツール

マップが多く用いられることから、観光資源や商店等の町歩きの情報提供は、観光客の回遊行動に大きく影響していると思われる。新たな観光資源の情報提供や周辺地域への回遊性を促す町歩き情報提供ツールは観光客の回遊性を向上させる上で重要な要素である。

- (1) 朴喜潤、佐藤滋 (2006)「中心市街地における都市空間構成と歩行者回遊行動に関する研究」日本建築学会計画系論文集、第605号、pp.143 - 150
 (2) 本稿では、Adobe社のコンピュータソフト「Illustrator」を使用した。Illustratorは描かれた線や面の色を透かすことができる（「不透明度」機能）。透かされた線や面は同様のものに重ねると、色が濃くなる（不透明度5%のものを重ねる度に10%、15%...と濃くなって行く。）

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程
 ** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授
 *** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程

*Doctor Course, Dept.of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo
 **Associate Prof., Dept.of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo
 ***Master Course., Dept.of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo